

イエレン議長はどこまで前向きな姿勢を示すか？～イエレン議長講演

2017年6月26日(月)

イエレン連邦準備制度理事会(FRB)議長が28日午前2時からロンドンで講演を行います。グローバルエコノミーが主題となります。観衆との質疑応答の時間も設けられており、今後の米金融政策動向についての発言が出てくる可能性があります。

今月14日、15日の米連邦公開市場委員会(FOMC)での議長会見では、米経済について、第1四半期の減速の後に回復、と自信を見せ、インフレの鈍化については、一時的な鈍化が大きく影響と、長期的なものではないことを示すなど、慎重派(ハト派)な議長にしては、かなり前向きな姿勢を示しました。バランスシートの縮小に関する、開始時期は未定としながらも、比較的早期に開始の可能性と、市場の見込む年内開始に前向きな姿勢を示しています。

FOMC前、市場では年内の利上げは6月で打ち止めとの見通しが広がりましたが、こちらについても、参加メンバーによる政策金利見通しは年内後一回以上の利上げを見込むメンバーが16人中12人と圧倒的(そのうち8名が後一回、4名が後二回)で、市場の見通しとFOMC内部に見通しのかい離を感じさせました。

ただ、二日目のFOMCの始まるわずか30分前に発表された米消費者物価指数(CPI)が予想以上に弱いことが、市場の警戒感を誘っています。

FOMCは二日間にかけて行われますが、議論は初日でほとんど出尽くします。政策金利見通しも初日時点で提出済み。一応二日目が始まる前に変更が可能な規則になっていますが、30分前に発表されたCPIをどこまで反映できているのかは微妙です。

こうした状況もあって、FOMCで比較的前向き姿勢が見られたにもかかわらず、金利市場での年内打ち止め見通しは50%を超える動きになっています。

市場では今後の金融政策動向に対する見通しがかなり分かれており、FRB関係者の発言を注視しています。

19日に講演があったダドリーNY連銀総裁は、比較的前向きな姿勢を示し、ドル買いを誘いました。ダドリー総裁は、米国の金融政策の実務を担う重職にあり、FOMCでは副議長を兼ねる重要な人物。比較的ハト派という認識が強いだけに市場の反応が大きになりました。

一方、ハト派で知られるカプラン・ダラス連銀総裁は20日、追加利上げに慎重になる必要と発言。ブラード・セントルイス連銀総裁もFOMCの見通しは利上げに不必要に積極的と、年内利上げ見通しを批判する姿勢を示しています。

ちなみに年内据え置き見通しをFOMCで掲げたのは4名。今回のFOMCで据え置きを主張したカシュカリ・ミネアポリス連銀総裁がほぼ確定的。ブラード・セントルイス連銀総裁も今回の利上げに否定的であったといわれており、これで2名。ハト派の代表格、エバンス・シカゴ連銀総裁も含めると3名。追加利上げに慎重になる必要と発言したカプラン・ダラス総裁、ハト派で知られるブレイナード理事と指を折って数えると4名を超えてします。(そもそもイエレン議長もハト派ですし)

となると中立ややハト程度の見方をされているカプラン総裁などは、今回の見通しでは利上げを示しながら、CPIなどの状況を見て、見通しをより軟化させてきた可能性も十分ありそう。

同じくハト派のイエレン議長も、講演では、会見以上に慎重姿勢を示す可能性も。この場合、ドル売りが強まる可能性がありますので要注意です。